

組織的な教員支援としての スチューデント・アシスタントの効果と課題†

岩崎千晶*¹・久保田賢一*²・水越敏行*³

関西大学大学院総合情報学研究科*¹・関西大学総合情報学部*²

関西大学特別顧問, 大阪大学名誉教授*³

本研究では、全学的に SA 制度を導入した関西大学を事例に、SA の活用状況、SA の効果と課題について教員と SA に対して質問紙調査をし、分析・考察を行った。分析の結果、89%の教員が SA の活用に満足し、授業内容や方法の改善に力を注げたと SA 制度を評価した。しかし、その一方で、SA のコンピュータ・スキルやマナーのばらつき、業務の不十分な引継ぎを問題視する意見があげられた。また SA として勤務した学生からは社会人としてのマナーやメディア活用能力が向上したなどの効果が見受けられた。このような分析をもとに今後の SA を活用した支援に関する方向性を得た。

キーワード：SA, 教員支援, 支援体制, 高等教育, FD

1. はじめに

多くの大学が授業改善に向けて、授業評価や公開授業などさまざまな取り組みを実施している。その中でも、Teaching Assistant (TA), Student Assistant (SA) として学生を授業支援のために雇用する事例が増えてきており(小笠原 2006, 岩崎ら 2007など)、今後の運用が期待されている(北野 2006)。毛利(2006)や野波ら(2004)は SA を情報実習や基礎演習の支援に活用し、授業を円滑に実施できたことや教材作成に役立ったことなど教員支援の効果と可能性を指摘している。同時に学生を支援人材として登用する効果として、支援することが学業に結びつき、学生にとっても有益だとの例も報告している。

このように TA, SA を活用することで教育効果が上がると指摘され、大学における活用事例は増加傾向にあるが、北野(2006)は支援人材の活用方法や導入による授業改善の効果についてまだ十分に研究されていないと指摘している。今後こうした教員支援を普及、充実させるためには、大学が組織的にどう対処すべきなのかを検討し、各大学での試みを共有し、支援のあり方や手立てを確立していくことが望まれる。

そこで、本研究では非常勤講師を含めた全教員が利用できる SA 制度を組織的に導入した関西大学を事例に、どのように SA が利用され、どういった効果と課題があったのかについて明らかにすることを研究の目的とする。組織的な SA の活用に関する知見は、大学の授業改善のあり方に示唆を与えられるであろう。

2. 関西大学における授業支援の組織と SA 制度

関西大学は10学部1機構あり、学生数が3万人近い大規模な私立大学である。同大学では、2006年秋に教務センター内に授業改善を目的とした事務組織を設置した。この組織は事務職員10名、特別顧問として教員1名、Advisory Staff (AS) として大学院生5名、SA として138名の学生から構成される。SA は資料や出席表の配布・回収・提出確認をして Excel に入力、LMS (Learning Management System) に投稿された課題の提

2008年3月31日受理

† Chiaki IWASAKI*¹, Kenichi KUBOTA*² and Toshiyuki MIZUKOSHI*³ : Assessing Activities of Student Assistants as Organizational Supports

*¹ Graduate school of Informatics, Kansai University, 2-1-1, Reizenjichou, Takatsuki, Osaka, 569-1095 Japan

*² Faculty of Informatics Kansai University, 2-1-1, Reizenjichou, Takatsuki, Osaka, 569-1095 Japan

*³ Kansai University, 3-3-35, Yamatechou, Suita, Osaka, 564-8680 Japan

出確認などの教員支援を行う。キャンパス内には5つの分室があり、それぞれ毎時間3名～5名のSAが勤務し、全学的な教員支援を展開している。SAの平均勤務数は週に3.9コマである。

教員は、業務依頼表を窓口に提出すれば支援を受けられる。そのほか電話・メール・WEBでの依頼も受け付けている。また授業当日の急な依頼にも対応する努力をしており、SAの数が足りない場合には他学舎から補充し、できるだけ教員の希望に添えるようにしている。2007年度秋学期にSA制度を利用した教員は623名であった。

SAの採用は面接をし、言葉遣い、対人コミュニケーション能力、就業意識、授業改善への意識、メディア活用能力を総合的に判断し、決定している。その後、SAは学期開始前に研修を受講し、SAとして作業をするために必要なスキル・態度を身につける。研修では社会人としてのマナーをはじめ、卓上機器・輪転機・プロジェクタ・ビデオカメラ・LMSの操作方法を学ぶ。この研修の企画・実施をするのがASである。

また、SAの代表者、事務職員、特別顧問、ASは隔週の会合を持ち、業務上の課題を出し合い、SA制度を改善するために協議している。

3. 教員への調査方法、質問紙の結果と考察

3.1. 教員への調査方法

2008年1月にSAに関する質問紙調査を実施した。実際にSAを利用した教員623名の36% (226名) が質問に回答した。質問項目は「業務依頼内容」(選択方式・複数回答可)「SAへの満足度」「SAの効果的な授業運営への寄与」(4件法、4:強く思う 3:思う 2:あまり思わない 1:思わない)を尋ねた。各設問には自由記述欄を設け、回答内容ごとに分類をして分析解釈に利用した。

3.2. 教員への質問紙の結果と考察

3.2.1. SAに対する業務依頼内容

業務依頼内容の調査結果を表1に示す。SAの業務は、主に出席表や資料の配布などの事務的な支援とメディア利用の支援で構成されていた。メディア利用は、PCやプロジェクタの設置が49%と最も多く、ビデオ撮影やLMSなどの利用に関する依頼は3～5%であった。

3.2.2. SAに対する満足度

SAへの満足度に関する調査結果を表2に示す。89%の教員がSAの業務について満足をしており、高い満足度を示している。自由記述は「授業の準備に専念で

表1 SAへの業務依頼内容

SAへの業務依頼内容		回答数	割合
事務支援	資料の配布	80	31%
	出席票の配布・回収・整理・データ化	59	23%
	レポートの回収・整理・返却・データ化	49	19%
	ミニツペーパーの配布・回収・整理・データ化	5	2%
メディア利用	教室でのPCやプロジェクタ等のセッティング	129	49%
	授業研究のためのビデオ撮影・編集	9	3%
	インフォメーションシステム・CEAS等のシステム利用支援相談	12	5%
	各種ソフト(パワーポイント、ワード、エクセル)の操作支援	12	5%
その他	小テストなどの試験監督補助	19	7%
	授業の参観(学生目線から授業進行・環境の印象を伝える為)	4	2%
	その他	10	4%

(N=226)

き、大変ありがたいです。予約がない場合にも即座に対応してくださり助かります」という意見や「出席確認のデータも即日に渡してもらい助かった」などがあげられた。依頼に対する対応の速さといつでも利用できる体制が高い満足度につながったと考えられる。

一方、不満と答えた教員の自由記述では、依頼に対して毎回同じSAが対応できるわけではないため、「SA間で、前回からの引継ぎがなされておらず、同じ不具合が起こった」など引継ぎが課題としてあげられた。今後は教員からの細かい指示を含めた依頼を確実に引き継ぐ手立てを導入し、SAが変わっても同じ質の支援を実施できる仕組みを作る必要がある。

またSAのマナーやメディア利用について、SAの間にスキルのばらつきが見られ、問題視する意見があった。「率先して仕事引き受けてくれる」「いつも丁寧に、迅速に対応してくれる」といった好印象の一方で、「SA同士の私語が目立ち、学生からクレームが来た」「言葉遣いがなっていない」という意見があった。また、「撮影してもらったビデオのクオリティに大きな差があった」「PCの設置は得意・不得意があり、かえって時間がかかることがあった」などの意見が寄せられた。

全教員がいつでも同じ質の安定した支援を受けられる環境を整備するにはSAを一定数確保し、従来の研修に加え、さらに言葉遣いや態度などのマナーやメディア活用能力を育成し、良質な支援をする能力を養う必要がある。

3.2.3. SAの効果的な授業運営への寄与

SAの授業への貢献に関する調査結果を表2に示す。SAを活用している91%の教員が「SAは効果的な授業運営に寄与している」と回答しており、SAの授業への貢献度は高いといえる。教員はこれまでレポートや出席表の整理を自身でしていたため膨大な時間がかかる

表2 SAへの満足度・効果的な授業運営への貢献度

質問項目	4	3	2	1
SAの業務について、満足されていますか	76	126	16	8
	33%	56%	7%	4%
SAは効果的な授業運営に寄与していますか	82	125	14	5
	36%	55%	6%	2%

上段は回答数，下段は割合（N=226）

など、事務的な作業の負担が大きかった。しかし「レポートの回収やデータ化などを手伝ってもらうことにより授業運営が効率化され、授業内容改善に力を注ぐことができた」や「授業をする以前の事務的な作業から解放されることで、授業内容や方法の改善に時間を活用できる」など、事務的な作業の削減により、その時間を授業内容や方法の改善に活かしたという意見が寄せられた。またこれまでは教員向けにメディアの利用相談や設置依頼をする支援が十分ではなかったが、SAにLMSの利用方法などを相談できてよかったという意見も見られた。さらに「DVD、スライドなどの教材を作成する時間を設定し、援助する体制ができないか」など、教材作成やLMSの資料配信の支援を希望する意見もあげられ、今後は教材作成などを含めたメディア利用の支援を検討する必要があると推測される。

4. SAへの調査方法、質問紙の結果と考察

4.1. SAへの調査方法

2008年1月にSA（138名）に質問紙調査を実施し、SAの有効回答率は89%（123名）であった。質問紙では「業務への自信」（5件法、5：かなり自信がある 4：自信がある 3：どちらともいえない 2：あまり自信がない 1：自信がない）、「SAをしてよかった点」（自由記述）などについて尋ねた。自由記述は、回答内容ごとに分類をしてカテゴリー化し、分析した。

4.2. SAへの質問紙の結果と考察

4.2.1. SAの業務に対する自信

SA業務への自信に関する調査結果を表3に示す。資料や出席表の配布回収等に関しては、約90%の学生が「自信がある」と回答しており、配布業務には大きな問題はないことがわかった。プロジェクト等の設置には91%の学生が「自信がある」と答えているが、その不具合の調整になると50%に減少した。教員からもこの点が問題視されていたため、不具合の対処に関するマニュアル作成や研修の実施が必要であろう。LMS利用については、学生からの利用相談に応えることに「自信がある」としたSAは65%であったが、教員からの

表3 SAの業務に対する自信

SAの業務に対する自信	5	4	3	2	1
資料の配布(96)	49	42	4	1	0
	51%	44%	4%	1%	0%
資料の印刷・コピー(108)	45	51	11	1	0
	42%	47%	10%	11%	0%
出席表の配布回収整理(94)	47	44	3	0	0
	50%	47%	3%	0%	0%
出席表のデータ入力(97)	39	46	10	2	0
	40%	47%	10%	2%	0%
PCやプロジェクト等の設置(122)	49	62	8	3	0
	40%	51%	7%	3%	0%
PCやプロジェクト等の不具合調整(115)	11	46	38	18	2
	10%	46%	33%	10%	2%
ビデオ撮影・編集(43)	9	20	9	5	0
	21%	47%	21%	12%	0%
学生からのLMS利用支援(61)	10	30	16	4	1
	16%	49%	26%	6%	2%
教員からのLMS利用支援(44)	2	11	17	10	4
	5%	25%	39%	23%	9%
各種ソフトの操作支援(70)	16	31	17	6	0
	23%	44%	24%	9%	0%
小テストの試験監督補助(74)	27	28	19	0	0
	37%	38%	26%	0%	0%
授業の参観(40)	11	19	9	1	0
	28%	48%	23%	3%	0%

()は回答者，上段は回答数，下段は割合（N=123）

利用相談になると30%にとどまった。SAは自分の経験を活かして学生への対応はできたが、教員用の操作方は研修でしか学んだ経験がなく、教員からの依頼数も少なかったことが要因だと考えられる。またビデオ撮影や各種ソフトの利用では、68%のSAが「自信がある」と回答していた。その学生の63%はASの実施した撮影方法に関する研修を受けており、研修の効果が伺えた。しかし勤務時間の都合で研修に参加していない学生がビデオ撮影の依頼に対応することもあり、教員からは映像の質にばらつきがあることが指摘されていた。今後はSAのメディア活用能力の向上に関する手立ての検討が重要になる。

4.2.2. SA活動を通じた学び

表4にSAとして活動してよかった点をまとめた結果を示す。最も意見が多かったのは「マニュアル制作でWordを学べた」「データ入力でExcelの計算式を学べた」などといったメディア活用能力の習得であった（52%）。学生は業務で得た知識を「実験のデータ収集に役立てる」など、自分の学業に活かしていることがわかった。次いで「就職や将来のことについて先輩と話す機会が持てよかった」「後輩の相談にのれてよかった」など教員や事務職員、異学年や他学部の学生

表4 SAをして良かったこと(自由記述複数回答)

SAをして良かったこと	回答数	割合
メディア活用能力が身についた	64	52%
教員や職員,学内の友人との交流が増えた	53	43%
大学についてより詳しくなった	43	35%
コミュニケーション力が身についた	28	23%
状況把握力が身についた	19	15%
受付や事務処理能力が身についた	7	6%
授業への参加態度が変わった	5	4%
その他	6	5%

(N=123)

との交流が増えたこと(43%)があげられた。現在ピア・サポートとして、先輩が後輩の相談にのる制度が大学に導入されつつあるが(山崎 2005) SA 業務を通じてそうした関係を築けている学生がいることもわかった。また「履修や授業、大学の設備など大学について詳しくなること」(35%)と答えた学生は「友人や後輩にアドバイスをできるようになった」など、SA 業務で学んだ知識やスキルが大学生活に有益であると感じていた。コミュニケーション力が身についた(23%)という学生からは「目上の人の接し方や自分の意見を端的にいうことを学び、就職活動にも活かせた」という意見があった。このように、SA 業務で学んだことを学業や大学生活に活かしている学生がいることがわかった。

5. まとめと今後の課題

組織的に SA を導入した結果、教員は SA に業務をいつでも依頼できるようになり、多くの教員はその支援に対して高い満足度を感じていた。また事務作業の効率化やメディア利用の負担減少など SA が授業運営に貢献していると考えている教員がいることもわかった。しかし教員の依頼は資料の配布やプロジェクタの設置などが中心であり、ビデオ撮影や LMS の操作支援など授業方法や授業内容に関わる支援は少ない。今後は依頼が少ない業務の原因や要望を聞き取り、業務内容の広報や SA の支援体制を検討する必要がある。

問題視されていた業務の引継ぎや SA のスキルのばらつきをなくすためには、良質な支援を教員に提供する手立てを検討する必要がある。そのためにマナーや教員とのやり取りを円滑にするためのコミュニケーション研修、PC やプロジェクタの不具合調整など依頼数が多い業務に対応するメディア研修を全 SA に実施する必要がある。ビデオ撮影・編集による教材制作や

LMS の活用支援は、依頼数は少ないが教育の質を改善する可能性が高い。こうした依頼に対応するには、高度なメディア活用能力が必要となるため、専門的な力を持った SA を新たに育成する必要がある。そして研修に加えて、経験のある SA が新たに雇用された SA を日常的な業務の中で教育する仕組みを整え、SA 同士で学びあう環境作りの組織化が必要であろう。

また学生は SA としての活動を通じて、メディア活用能力を身につけることができ、やりがいや学習に対する意欲の向上も指摘された。学生の意欲の向上に結びつく形で業務分担をし、支援活動と SA である学生自身の学びをつなげることが望ましい。

今後は、質問紙調査に協力した教員の中から、教材制作や参加型授業の補助といった教育効果が高いと考えられ、特色のある支援を依頼した教員、また SA 制度に対する課題や展望に関する意見を述べた教員を対象にインタビュー調査を実施する予定である。そして、SA の活動が効果的な授業運営に具体的にどう寄与しているのかをさらに調査し、SA 制度の改善につなげていきたい。

参考文献

- 岩崎千晶・今岡義明・岸磨貴子・水越敏行(2007) 高等教育における授業改善の支援体制とその取り組み. 第23回日本教育工学会全国大会講演論文集: 805-806
- 北野秋男(2006) 日本のティーチング・アシスタント制度. 東信堂, 東京
- 毛利康俊(2006) Student Assistant 制度の創設について. 西南学院大学法学論集, 38(3.4): 161-167
- 野波侑里, 中崎修一, 佐々木英洋, 大塚智津子, 浦畑育生, 小野厚夫(2004) 大手前学園伊丹キャンパスにおける情報教育関係スチューデント・アシスタントの実態調査報告. 大手前大学社会文化学部論集, 4: 163-185
- 小笠原正明, 西森敏之, 瀬名波栄潤(2006) TA 実践ガイドブック. 玉川大学出版部, 東京
- 山崎理央, 三宅幹子, 橋本優花里, 平伸二, 松田文子(2005) 大学生へのピア・サポート訓練による自尊感情や自己開示, 社会的スキルへの効果の検討. 福山大学人間文化学部紀要, 5: 19-30

(Received March 31, 2008)